

## 今しかない

鹿児島県立甲南高等学校 二年 福留豪希

——今年の夏も『ただいま』という声を聞けなかった——弟の修一さんを北朝鮮に拉致されてから四十七年となる八月十二日、市川健一さんは無念の思いを滲ませた。

市川さんをはじめ拉致被害者のご家族は、被害者の一刻も早い帰国の実現を願い、長年闘い続けている。高齢となった親・兄弟にとって、被害者との再会は何よりも切実な願いである。

私は昨年十二月に開催されたシンポジウムで、有本恵子さんの父・明弘さんと横田めぐみさんの母・早紀江さんをお見かけした。我が子をなんとしても取り戻したいという早紀江さんの強い訴えを聞き、自分に出来ることを考えると同時に、親にとつて一日一日がとても大切であることを改めて実感した。しかし今年の二月、明弘さんの訃報が報じられた。我が子との再会を果たせないまま亡くなられた方がまた一人増えてしまった。市川さんは「自分たちも拉致被害者も高齢化していく。時間が無い」といつも話される。ご家族は人生の半分以上を拉致問題解決に向けて取り組んでこられた。しかし二〇〇二年以降、有力な情報は得られず進展がないまま、ただ時間だけが過ぎた。あと何年、被害者家族は頑張らなければならぬのだろう。

今しかない。今こそ私たちが関心を持ち、声をあげる時だ。その思いから市川さんと共に署名活動をし、個人でも署名を集め、仲間と共に勉強会も開催した。

その活動の中で気づいたことがある。私たちの世代に限らず、拉致事件以降に生まれた世代には拉致問題の内容をよく知らない人が多い。また、拉致問題を知る世代の一部からは年月が経ち過ぎていて「昔の問題だ」「今さら」という反応もある。これらの状況こそ拉致問題に対する関心を薄くし、解決への機運が高まらない要因の一つなのではないか。

八十代の私の祖父は余生をのんびりと過ごしているが、八十歳の市川さんは「今、頑張らないと解決できない」と妻の龍子さんと県内各地で活動している。

修一さんと思うご夫妻の言葉は世代を問わず心に響く。私は市川さんたちの思いを一人でも多くの人に伝えなければと強く思う一方、これまでの経験から関心を持ってもらう難しさも感じている。

でも私は諦めない。私には「かえるの会」という共に拉致問題に取り組む仲間がいる。知恵を出し合い、出来ることを実践し、訴え続けたい。「拉致問題は、現在進行形の人権問題であり、決して過去の出来事ではありません。ぜひ、自分事として考えてください。大切な家族や友達が突然いなくなったら、貴方はどう思うのか、どう行動するのか。私は全ての拉致被害者の帰国を、ご家族が笑顔で再会できる日を、強く願っています。」

『修ちゃんカエル、必ず帰る』